

# 大汶口文化の廟底溝類型系彩陶

西 谷 大

---

はじめに	4 大汶口文化遺跡での出土状況
1 研究の動向	5 出土状況の比較
2 文様と器形の分類	6 大汶口文化の墓制と彩陶
3 仰韶文化遺跡での出土状況	7 小結

---

## 論文要旨

本稿は、大汶口文化諸遺跡で発見された仰韶文化の廟底溝類型系彩陶を取り上げ、この彩陶が、渭河流域、黄河中・下流域から山東地区の大汶口文化に伝播していく様態を追求することによって、廟底溝類型期の各地域間にみられる文化交流の中で、彩陶が具体的にどの様な意味をもつのかを考えようとするものである。

まず、彩陶の各地域・遺跡での出土状況の相異に注目した。河南中部地域および渭河流域の仰韶文化地域において、廟底溝類型系彩陶は、他の土器とともに日常生活の中で使用されたと考えられ、彩陶を墓に副葬するといった習慣は低かったと推測した。次に、山東地区における大汶口文化早期では、廟底溝類型系彩陶が墓で副葬品として発見されることから、彩陶自体が本来有していた食生活用の容器という機能が、明器という機能へ変化したことを指摘し、さらに大汶口文化早期の山東地区では、仰韶文化の廟底溝類型系彩陶の一部の器形と文様を、選択的に取り入れたことを示した。最後に、大墩子・劉林遺跡の墓葬を分析することによって、廟底溝類型系彩陶を副葬するのは、墓域中、副葬品を多く有する裕福な人物の墓であり、彩陶は集団内での権威の象徴として取り扱われた確率が高いと推論した。

いずれにしても大汶口文化早期段階の山東地区の人々は、彩陶を実に主体的に取り入れている。それは、本来日常容器であった彩陶を明器に用途を変化させたこと、また、廟底溝類型系の彩陶の中でも最も精緻で、複雑な文様のものを好んで使用したことに如実に現れている。大汶口文化早期の廟底溝類型系彩陶は、渭河流域・河南中部地域から、人の移住に伴って山東地区にもたらされたのではなく、むしろ物の交易を中心とした交流の中で出現したのだろうと思われる。